

4 年制赤十字看護大学における国際救援に貢献できる人材育成
ー基礎的能力を育む教育プログラムの検討ー

研究代表者	村田由香	
研究分担者	吉野純子	中信利恵子
	川西美佐	戸村道子
	Simon G. Capper	女鹿 喜治

I. はじめに

日本赤十字社は、1890 年（明治 23 年）より救護看護師の養成を開始し、歴史的に、看護師教育に先駆的に取り組んできた。それは、赤十字の理念である人道の実践を果たすためであり、赤十字で教育を受けた看護師は、それぞれが救護員としての自覚のもとに、医療はもとより社会に貢献する人材として育成されてきた。1998 年（平成 10 年）には「日本赤十字社の看護婦（士）養成の基本的方向性」を策定している。この中で「多様な価値観を尊重し、人間性が豊かで国の内外の救護活動で活躍できる資質の高い看護師は大学で養成する」方針を示している。

本研究が目指すものは、日本赤十字広島看護大学における国際救援・救護に貢献できる人材を育成することにある。その理由として、国内外で災害が多発している今日において、人道支援を掲げる日本赤十字社の果たす役割は大きいことがあげられる。

そのために、国際救援・救護活動には看護実践能力に加え、語学能力をもった人材育成の必要がある。日本赤十字広島看護大学は、「国際平和文化都市」に位置している。そして、赤十字の国際救援・救護活動に関心を示し、入学してきた学生も多い。学生時代から、国際救援活動の実際を生活や語学の話を含めて聞くことができたなら、具体的な将来像と現実性を持って語学の勉強に取り組み、臨床に出た後もモチベーションを保ち続けることに役立つと考えられる（会沢、2001）。

これらのことから、語学教員、各領域担当看護教員、赤十字関連科目担当教員、日本赤十字社広島県支部、赤十字病院との連携を図り、大学で看護・医療の分野だけでなく、語学教育を含めた国際救援・救護活動に必要な 4 年間一貫した内容で構成された基礎的能力を育む教育プログラムの検討を行うことは重要である。

本研究によって展開される教育プログラムは、入学時から卒業時にいたるまで一貫した国際救援・救護活動に必要な基礎的能力を育成する内容で構成される。したがって、本教育プログラムを経て卒業した学生は、国際救援拠点病院に就職し、現場での教育・訓練を得て潜在的に国際救援活動に貢献できる有能な看護師を増やすことにつながる。

II. 研究目的

1. 赤十字の国際救援活動に貢献できる人材育成のために大学卒業時に必要とされる基礎的能力を明らかにする。
2. 赤十字の国際救援活動に貢献できる人材に必要な基礎的能力を育成するために必要な入学時から卒業時までの一貫した構成内容の教育プログラムを検討する。

III. 研究方法

1) 研究対象者

赤十字国際救援・開発事業にヘッドナースとして携わった国際救援拠点病院の赤十字看護師と所属病院の継続教育に携わっている看護管理者計 10 名を対象とした。

2) 方法

(1) 面接調査

国際救援活動に貢献する人材育成に関する文献検討を行った後に、インタビューガイドを作成し、国際救援拠点病院となっている 4 病院に所属する看護管理者に半構成的面接法を用いてインタビューを実施した。

(2) 研究期間

2006 年 4 月から 2007 年 5 月まで

データ収集は 2006 年 9 月から 11 月

(3) 分析方法

テープ録音したインタビューを逐語録に起こし、質的に分析し、赤十字の国際救援活動に貢献する人材育成のために大学卒業時に必要とされる基礎的能力とその能力の開発の点からカテゴリー化した。

(4) ヘッドナースとして海外派遣経験のある看護師へのインタビューの項目は以下の項目である。

- ① どのような動機と経験で、赤十字国際救援活動に参加されるようになりましたか。
- ② 赤十字の国際救援活動に行く人に必要な看護実践能力や考え方はどのようなものですか。
- ③ 海外で働くということに必要な資質は何ですか。
- ④ 海外で国際救援活動をするための専門的知識にはどのようなものがありますか。
- ⑤ 国際救援活動に参加したいと考えている赤十字系大学生が、卒業時に必要と思われる能力はどのようなものと思われますか。
- ⑥ 学生のときに体験しておくといわれることがありましたら、教えてください。
- ⑦ 国際救援看護師の院内での看護業務と平素からのトレーニングについて工夫していることがありましたら教えてください。
- ⑧ 国際医療救援看護師の人材育成における問題や課題がありましたら教えてください。

(5) 国際救援看護師の教育に携わっている看護管理者へのインタビューの項目は以下の項目である。

- ①国際医療救援拠点病院として、看護師の人材育成に関する教育プログラムを教えてください。(新卒教育プログラムから国際救援活動まで)
- ②赤十字の国際救援活動に行く人に必要な看護実践能力や考え方はどのようなものですか。
- ③海外で働くということに必要な資質は何ですか。
- ④海外で国際救援活動をするための専門的知識にはどのようなものがありますか。
- ⑤国際救援活動に参加したいと考えている赤十字系大学生が、卒業時に必要と思われる能力はどのようなものと思われますか。
- ⑥学生のときに体験しておくといわれることがありましたら、教えてください。
- ⑦国際救援看護師の院内での看護業務と平素からのトレーニングについて工夫していることがありましたら教えてください。
- ⑧国際医療救援看護師の人材育成における問題や課題がありましたら教えてください。

3) 倫理的配慮

調査に際しては、研究対象者の所属する施設の看護部長に研究の主旨と方法を説明し、同意を得た。その後、研究対象者に研究の目的、内容、方法を十分に口頭と文書で説明し、研究協力依頼を文書および口頭で行い、面接者には自由意志での研究協力を保障し、面接に際して研究協力同意書に署名してもらいその自由意志を確認した。

得られた個別情報は研究者以外には漏れないよう、厳重にその保護に努め、コード化し匿名性を確保した。取得したテープ等の情報は研究終了後には破棄することを約束した。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者 10 名の職位は、看護教員 2 名・看護係長 1 名・看護師長 6 名・看護部長 1 名であった。派遣経験の内容は、ERU、ICRC、地震・津波被災者救援事業、干ばつ被災者救援、保健医療支援事業、紛争犠牲者救援などであった。

2. 赤十字の国際救援活動に貢献する人材育成のために大学卒業時に必要とされる基礎的能力

インタビューの結果から、赤十字国際救援活動に貢献する人材としての基礎的能力・基本的資質として①赤十字の知識・海外活動への理解・看護実践活動の知識・異文化理解などの知識②人間関係構築能力・看護実践能力・自己管理能力などの実践能力③ヒューマン・ケアリングとしての人間性が求められることが明らかになった(表 1)。

1) 知識について

4年制赤十字大学の卒業時に必要な基礎的能力のうち、中項目として赤十字に関する知識、海外活動への理解、看護実践活動の知識、異文化理解の4項目があった。

(1) 赤十字に関する知識については、赤十字の理念・組織、赤十字の活動の目的・目標の理解、国際人道法の理解、赤十字7原則を日常的に使える知識の理解があった。

表1 4年制赤十字大学卒業時に国際救援活動に貢献する人材として求められる基礎的能力

大項目	中項目	小項目
知識	赤十字の知識	赤十字の理念・組織・活動
		国際人道法
	海外活動への理解	赤十字の海外活動
		赤十字以外の海外活動
	看護実践活動の知識	基礎的看護知識
		災害看護に関する基礎的知識
		プライマリ・ヘルスケアに関する基礎的知識
		管理・教育に関する基礎的知識
	異文化理解	多種多様な文化に関する基礎的知識
		海外での体験学習
実践能力	人間関係構築能力	語学力
		コミュニケーション能力
	看護実践能力	確実な看護技術
		マネジメントに関する基礎的能力
		問題解決能力
	自己管理能力	多様な文化や状況への適応能力
		生活力
人間性	ヒューマン・ケアリング	自立した精神
		人を思いやるやさしさ
		協調性

(2) 赤十字の海外活動に関する知識

赤十字の海外活動に関する知識としては、赤十字の研修への参加、国際救援活動者の経験の講演会への参加などにより、具体的にどのような活動をしているのか、知識として知ることがあげられた。また、赤十字以外の海外活動については、国際救援に対する幅広い知識・幅広い視野を持つためにも、青年海外協力隊の人の話を聞く機会や赤十字以外の研修参加の機会を持つこともあげられた。

(3)看護実践活動の知識については、さらに①基礎的看護知識②災害看護に関する基礎的知識③プライマリ・ヘルスケアに関する基礎的知識④管理・教育に関する基礎的知識の4つの小項目で構成された。

① 基礎的看護知識

基本的な看護の知識の習得は当然必須であり、知識に伴う「判断力」「応用力」は卒業後に習得するようになるということがあげられていた。

② 災害看護に関する知識

赤十字救急法習得は必須であり、トリアージの知識を持つこと、院外・院内の防災訓練への積極的参加、国内救援活動ができる知識を持つことなどがあげられた。また、災害支援優先者や開発援助についての基礎的知識も持つことが、卒業時に必要な知識として述べられていた。

③ プライマリ・ヘルスケアに関する基礎的知識

プライマリ・ヘルスケアに関する基礎的知識として、具体的な内容には、公衆衛生に関する知識、熱帯医学に関する知識、栄養指導に関する知識があげられ、地域に目を向けられるような教育、公衆衛生に対する保健活動などの基礎的知識を持っていることが望まれていた。また、WATSAN(water & sanitation; 水と衛生分野)の専門家の話などについての知識も必要とされていた。

④ 管理・教育に関する基礎知識

「赤十字の場合、特に、教育をしたり、病棟の管理などスタッフ管理・スタッフ教育を実施する立場で派遣されることが多く」、看護教育・看護管理に関する基礎的知識が必要とされていた。

(4)異文化理解

異文化理解は、①多種多様な文化に関する基礎的知識②海外での体験学習の小項目で構成した。

①多種多様な文化に関する基礎的知識

異文化を理解するには、宗教学、文化人類学などの学問の習得や外国人との交流の機会をもつことがあげられた。

②海外での体験学習

海外研修プログラムへの参加、赤十字のカンボジア・タイなどのプロジェクトの見学・体験、赤十字がプロジェクトを展開しているアフリカ・アジア諸国での活動の見学(例えばタンザニアやフィリピンなど)、国際協力機構(JICA)、国境なき医師団(MSF)、国際緊急援助隊医療チーム(JMTR)への参加など、具体的な内容があった。

2)実践能力について

実践能力は、人間関係構築能力、看護実践能力、自己管理能力の3つの中項目で構成した。

(1)人間関係構築能力

人間関係構築能力は、さらに、①語学力②コミュニケーション能力の2つの小項目で構成した。

① 語学力

共通する意見として最も多かったものは、「語学力」であり、就職した後に、モチベーションを保ち続けるためには、語学力を身につけていることは重要要素であることがわかった。日本赤十字社では国際救援・開発協力要員基礎研修会(BASIC TRAINING COURSE FOR FUTURE DELEGATES 以下BTCと略す)の参加資格をTOEIC730点以上としていることから、具体的には英語(TOEIC600点以上・BTCを受けられる程度)や最低限、英語でディスカッションする能力、医学用語を含めた英語力(解剖・疾患・症状)などが望まれていた。また、第2語学としてフランス語、スペイン語の習得もあればよいという意見もあった。

② コミュニケーション能力

日本語でのディスカッションの能力、他者理解、自己理解の経験を積む、積極的な対人関係能力、オープンに話せる能力、プレゼンテーション能力・自己表現の能力、チームワークをとることのできる能力、自己主張ができるなど、具体的な行動として表現された。

(2) 看護実践能力

看護実践能力として①確実な看護技術②マネジメントに関する基礎的能力③問題解決能力があった。

- ① 確実な看護技術としては、衛生管理や清潔にするなどの基本的な知識・技術、看護技術に関しては基本をしっかりと身につけておくことが必要とされていた。また、災害看護実践能力として、救急法の技術の習得は必要とされていた。
- ② マネジメントに関する基礎的能力としては、人材・物品を管理するための基礎的能力が必要とされていた。
- ③ 問題解決能力に関する基礎的能力としては、看護上における問題解決だけでなく、「日常生活においてちょっとわからないことを積極的に情報収集」しながら「どう解決すればいいのか、どう求めればいいのかがわかる」という問題解決能力が求められていた。

(3) 自己管理能力

自己管理能力としては①多様な文化や状況への適応能力②生活力の小項目から構成した。

① 多様な文化や状況への適応能力

「環境が変わったときにいろいろな人と人間関係を作ることができるストレスの処理能力」、「自分の限界を知っておくこと」、「状況にあわせて対応する」「違う社会にすぐ溶け込める適応力」「判断力」、「自分の価値観ばかりに凝り固まらないような柔軟性」、「文化を受け入れたり、他者を認める」、「自分のいる場所や状況に合

わせていく能力」などがあげられた。また、「赤十字が何か、大きな目的、目標があったら、ご飯がどうであろうと、済むところがどうであろうと、言葉が通じないであろうとか、あまり気にしない、・・・赤十字とはということを日常生活の中から学んでいくことが学生には非常に重要」という意見もあった。

② 生活力

異文化社会での生活に適応するための身体的・精神的な能力として、「自分たちの食べるものは自分たちで作らないといけないので、料理はできたほうが良い」「自律して生活できる能力」が必要という意見があった。

2) 人間性について

ヒューマン・ケアリングの観点から、①自立した精神②人を思いやるやさしさ③協調性の3つの小項目で構成した。

① 自立した精神

外交的であること、自立性が育っていること、一般常識があること、与えられた役割を果たせる能力が卒業時には必要とされていた。また、赤十字の理念に基づいた行動力、赤十字の一員としての信念を持ちながら、看護者として行動できることも必要とされていた。

② 人を思いやるやさしさ

相手を尊重する気持ち、謙遜の心を持っていること、人に対して何か自分が一生懸命したいという気持ちなどがあげられ、中には、「対象に対して誠意を持って関わりたいという気持ちだけ育ててくれていればいい」という意見もあった。

③ 協調性

他者との協調ができることがあがっていた。

その他、一部の意見として、「看護の基礎教育は直接的には役に立たない」「少数エリート制に特化しないと使える人材育成にはならない」などの意見もあった。

以上の結果を元に、現行のカリキュラム内容の見直しを行った。

V. 考察

1. 国際救援に貢献できる人材として4年制赤十字大学卒業時に必要とされる基礎的能力

本学は、赤十字の大学として、資質の高い看護師や将来の救護看護師や看護指導者を育成する役割を担っている。その役割を果たしていくためには、できるだけ多くの学生が、将来期待される役割が担える人材に育つよう、大学をあげて学生にその機会を提供できるよう取り組む必要がある。

今回の面接調査では、4年制赤十字大学卒業時に国際救援に貢献できる人材として必要な基礎的能力として、赤十字の理念・海外活動への理解・看護実践活動の知識・異文化理解などの知識、実践能力として人間関係構築力・看護実践能力・自己管理能力、ヒューマン・ケアリングに関わる人間性の大きく3つの基礎的能力が求められていること

がわかった。

特に、赤十字の理念に精通していることは、赤十字大学での卒業時の基礎的能力としては必須である。救援活動は常に根本的なジレンマを抱えている。災害発生時から起こってくるさまざまな問題を解決する際に、倫理的判断基準となるのが人道・公平の原則である(平野,2006)。このことから、看護基礎教育終了時には、国内外における赤十字運動の推進者となれるよう、まず個人を尊重した看護活動ができる基礎的能力を有しておくことが望まれる。そのためにも、赤十字の理念の下、4年の教育過程で、赤十字の基本原則を日常生活、看護実践、災害時に活かし実践できる能力を養うことは赤十字看護師養成において重要である。現在は、自治会活動の一環である赤十字奉仕団活動などへの参加も、赤十字の理解を深めるものとして位置づけ、教育プログラムに組み込んでいくことも考慮する必要がある。

柳澤(1997)は、国際協力に関わる看護職に多い悩みとして、語学力・予想していた業務と現実とのギャップ・文化、宗教の違い、環境の違い、人間関係、人道的悩みなど11項目を挙げている。今回の調査においても、基礎的能力に望まれることとして、同様の項目が得られている。特に、語学力に関しては、どの研究協力者も、一様に必要性を述べていた。他国の人々とのチームの中でコミュニケーションをとり、人間関係を築く上でも、語学力は欠かせない。また、国際救援活動の現場では、日常会話だけでなく、討論、交渉、文書作成などを外国語で行わなければならない。就職してから後に、拠点病院では集中的に語学研修を行うが、実際に卒業後3～5年の間、国際救援看護師志願者としてモチベーションを保ち続けるためにも、語学力を身につけておくことは有用であり、積極的な教育プログラムへの取り組みが必要である。

国際救援活動における看護の役割には、①被災患者や家族に対する直接ケア②現地スタッフとの協働や他部門との連絡調整などを含んだ管理業務に分かれる。そこで活動するには、災害に対する基本的知識と技術、語学力、異文化理解などを始め、自然環境の違いや異文化の中で看護活動ができる資質、異文化の中での管理能力や協調性などが必要である(小原,2006)。これらの資質の基を看護基礎教育の中で育成するための教育内容・方法をどのようにするのか、創意工夫が求められる。

本学は、ヒューマン・ケアリングを教育理念の基軸にしており、「人間」「知」「関係」「技」の統合の上に基礎的なヒューマン・ケアリングが実践できる能力の育成を目指している(稲岡,2001)。そして、講義・演習・実習の過程でその理解を深め、実践力を高められるように学習を支援している。特に「技」の領域にある看護学実習では教員と実習指導者が協同して、ヒューマン・ケアリングに共通認識を持ち、指導展開を図ることが必要である。そして、今後よりいっそう自律した精神・人を思いやる優しさ・協調性が身につくような教育方法の開発、現行カリキュラムの評価と再構築を行っていくことが求められる。

2. 入学時から卒業時までの一貫した構成内容の教育プログラムの検討

本研究が目指すものは、赤十字の“人道”の理念のもとに、国内外で救援・救護活動を組織的に実施できる基礎的能力育成のための大学教育プログラムの構築である。そのために、次の目標を立てて取り組んでいくこととした。①1年次から4年次を通じて、系統的に科目選択・履修することで、段階的に必要な基礎的能力が身につくような科目の構造化をしていく。②赤十字奉仕団活動などへの参加も、赤十字活動への理解を深めるものとして位置づけ、プログラムに組み込んでいく。③基礎的能力の活用および応用段階として、4年次に海外研修を実施し、現地体験を通して国際感覚や救援活動へのイメージ化を行う。

しかしながら、現行のカリキュラムでは、国際救援・救護活動が行える人を意識的に育成するカリキュラムと成り得ていない。また、各教員の国際救援・救護活動に貢献する人材の育成への意識もまだ低く、各科目において意識的に授業内容に組み込み、教授されていないのが現状である。1年次からでも、または2年次からでもこの教育プログラムを選択すれば、国内外で救援・救護活動を組織的に実施できる基礎的能力を身につけることができるように、展開していくことが必要である。そして、大学全体をあげて、この教育プログラムの各科目の担当教員が意識的に授業内容を工夫していくことが必要となる。そこで、以下の3点について教育プログラムの検討を行った。

1) 科目設定(内容、配当年次)

将来国際救援活動を希望する学生のために履修モデルを作成した(表 2.3)。現在の本学のカリキュラムにおいて、赤十字の活動の理解と実践者の育成のために、1年次に必修科目「赤十字の歩みと活動」、2～4年次に選択科目「赤十字救護・援助方法Ⅰ(救急法)・Ⅱ(水上安全法)・Ⅲ(家庭看護法)」を授業科目としている。また、災害救援・救護活動の理解のために、平成18年度入学生より「災害看護学」を4年次に必須科目に変更し、災害救護訓練の実践的技術の習得に向けて訓練を体験することも組み込んだ。今後は、日本赤十字社広島県支部や地域との連携を深め、大規模防災訓練への参加など新たに履修コースを選択した学生の体験学習を開拓して行く必要がある。

国際救援・救護活動に関する科目としては、国際的な視点から看護を捉えるために、1年次の必修科目「赤十字の歩みと活動」では、動機付けとして国際救援活動への派遣経験が豊富な体験を赤十字看護師が語るコマを設けている。また、3年次に選択科目「国際社会と保健活動」、4年次に選択科目「国際看護学」を展開している。現在は先進国である米国で国際看護演習を行っているが、国際救援・救護活動の需要が高いのは、発展途上国であり、こうした国の文化に直接触れて、理解を深めることも重要である。そのために、アジアに国際看護演習の場の開拓を試みている。学生の興味・関心を大切に、学習の場を広げるためにも、学生に発展途上国に行ける機会を提供することが肝要である。また、国際救援活動に関しては、国際保健や国際開発が重要視されるため、今後はこれらの科目を新たに開設することも検討する必要がある。

語学に関しては、国際救援・救護活動の場において、語学を活用してコミュニケーションを図り、リーダー的存在となることを目指して在学中に基礎的な語学力を養う。そのために、1年入学時から卒業まで、一貫して語学を学習できるように、カリキュラムを工夫した。1年次に必須科目である「英語」を学習し、2年次には選択科目として「英語」および「フランス語」「中国語」を履修できる。4年次には、国外での活動や外国人を対象とした看護を視野に入れて、選択科目「看護英語」をおいている。また、昨年度より、希望者が積極的に TOEIC の受験し、能力を向上できるよう配慮している。さらに、英語のネイティブ・スピーカーである専任教員が2名、非常勤講師が2名で教授している。語学教育としてだけでなく、外国人教員と接し、活動するという体験を通して、異文化を理解しようという姿勢を身につけることにもつながるため、積極的にコミュニケーションの機会を持つことのできる環境を提供する工夫も必要であろう。さらに、学内での授業だけでなく、課外活動として、地域で開催されている外国人との交流の場に積極的に参加し、外国人と交流し視野を広げ、異文化の理解が深まるような機会も提供することも必要である。実際に異文化に触れて、看護を国際的な視点から捉えるために、4年次の選択科目「国際看護学演習」を履修することも特化するコースに組み込むことも必要である。

2)履修指導

平成18年度入学生より、カリキュラムの一部を改正し、1年次から4年次にかけて、より系統的に学習できるように、履修指導を積極的に行い、学生を支援し、国際救援・救護に貢献できる人材の育成を目指すことができるよう検討した。これまで、選択科目であった「災害看護学」を必修科目として、本学に入学したより多くの学生が、災害時の救援・救護活動や看護に興味を持つことができるようにした。

本学は、教員と学生とのふれあいを通して、学生生活を有意義に過ごすことができるように、また人格の陶冶にむけて援助していくことを目的として、チュートリアル制度を導入している。チューターは、履修指導や個別相談、生活指導、また卒業を控えた学生には就職相談などを通じて、各学生が学習活動に意欲的に取り組み、自己の適性や将来の目標を考慮しながら将来を自己決定していけるように支援している。国際救援看護師を志願している学生のモチベーションを保ち続けられるように、入学時のオリエンテーション、毎年年度初めの学年毎ガイダンス、チューターによる個別指導を通して、一貫した履修指導を実施し、学習支援をしていく体制を強化する必要がある。

3)課外活動推進

本研究の結果では、「人間関係構築能力」や「自己管理能力」などの社会性に関する実践力や人間性に関する能力を求められていることがわかった。現代の学生の特徴として、社会性の乏しさがあげられる。将来、国際救援・救護の場において、救護看護師として看護活動が行え、さらに看護指導者としての役割を担うためには、社会性は

重要な要素である。本学では、平成 18 年度より日本赤十字広島看護大学学生奉仕団が発足し、学生委員会がその活動を支援している。今後は、社会性やボランティア精神を育成させるためにも、日本赤十字社広島県支部と連携をとり、奉仕団活動が主体的・積極的に推進できるよう支援していくことが必要である。

また、課外活動として、地域で開催されている外国人との交流の場に積極的に参加し、外国人と交流し視野を広げ、異文化の理解が深まるような機会も提供することも必要である。

さらに、赤十字系大学間での情報の共有や赤十字施設との連携、赤十字看護師育成のための継続教育との連携を具体的にどのように図っていくのか検討していくことも必要である。

VI. おわりに

日本赤十字社は、全国赤十字施設において、将来、国内外の救援・救護活動を担う人材の育成を目的に、日本赤十字社の救護員としての赤十字看護師の養成を行っている。大学においては、国際救援活動へのモチベーションや意欲を高められるように教育を行い、卒業後継続して教育を受けることができるよう大学と赤十字施設との連携をとり、より質の高い人材育成へとつなげることは、赤十字の発展のためにも重要である。

本研究では、4 年制赤十字大学生の卒業時の基礎的能力を明らかにし、教育プログラムの検討を行った。今後は、新たに特化したコース履修者の状況の把握と、プログラムの評価を段階的に行っていくことが必要である。

VII. 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。なお、本研究は平成 18 年度「赤十字と看護・介護に関する研究」の助成を受けて実施いたしました。

引用文献

- 会沢紀子(2001). 救護員としての赤十字看護師の目指すもの—国際救護活動より—, 日本赤十字看護学会誌, Vol.1, No.11, 925.
- 稲岡文昭 (2001). ヒューマン・ケアリングを教育理念にしたカリキュラム構築と課題—日本赤十字広島看護大学の場合—, Quality Nursing, Vol.7, No.1, 23-32.
- 平野美樹子(2006). 「人道」を基盤とした災害看護演習プログラム—避けえた死を防ぐ技術と精神的安寧を測る技術との統合—, 看護展望, vol31, No.8, 884-889.
- 小原真理子 (2006). 看護基礎教育における災害看護の必要性, 看護教育, vol31, No.8, 865-868.
- 柳澤理子(1997). 看護の国際協力のイメージと実際, 看護教育, vol38, No.12, 1014-1022.

参考文献

- 稲田美和(2001). 21 世紀の赤十字の看護教育—私たちの構想と私たちの約束, 日本赤十字看護学会誌, Vol.1, No.1, 9-19.
- 樋口康子(1988). 看護の専門家を育成する基礎教育, 看護教育, vol29, No.8, 454.
- 平岡啓子・吉野純子(2005). 看護系大学における「国際看護・保健」に関する研究の実態と課題, 看護学統合研究, 6 巻 2 号, 1-7.
- 本名信行・秋山高二他編著(2005). 異文化理解とコミュニケーション, 5 異文化理解の教育とトレーニング, 三修社, 98-125.
- 亀山美智子(1984). 近代日本看護史日本赤十字社と看護, ドメス出版
- 京極高宣 (2005). 「日本赤十字社に対する国民の意識と今後の対応」に関する調査研究, 調査研究報告書
- 酒井康江・江藤節代他 (2005). 開発途上国における研修の実践 学生が主体となって行った研修の成果その要因, 看護教育, Vol46, No.8, 724-727.
- 鈴木聖子・伊藤理恵子他(1989). 看護学校における卒業時到達目標思案の作成, 看護教育, Vol30, No.13, 824-828.
- 高島和歌子(2002). 国際救援活動, 国際救援活動のための教育と体制, 日本赤十字看護学会誌, 2 巻, 1 号, 14-15.
- 田代順子他 (2003). 開発途上国における看護技術移転教育プログラムの開発に関する研究 (研究機関 2002 年度-2004 年度), 2003 年度研究報告書, 38 - 41.
- 薮本充雄・中西英登(2000). 和歌山医療センターの国際救援状況と展望, 日赤医学, 55 巻, 1 号, 82.
- 山本捷子・谷岸悦子他(2002). 災害看護学の学習方法の試み 日赤福岡県支部の救護訓練参加による学生の学びから, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 1 号, 88-98.
- 山本捷子(2005). 「赤十字概論」の授業がめざすもの—赤十字看護教育への示唆を求めて—, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 4 号, 152-159.
- 山本捷子(2005). 日本赤十字社救護看護の歴史と災害看護教育の課題, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 3 号, 219-227.
- 吉野純子(2006). 国際看護教育の現状と課題, インターナショナルナースングレビュー, 29 巻 4 号 20-22.

表2 大学卒業時に国際救援活動に貢献する人材として求められる基礎的能力と関連科目

大項目	中項目	小項目	主な関連科目
知識	赤十字の理念	赤十字の理念・組織・活動 国際人道法	赤十字の歩みと活動 生命と倫理
	海外活動への理解	赤十字の海外活動	赤十字の歩みと活動
		赤十字以外の海外活動	国際社会と保健活動
	看護実践活動の知識	基礎的看護知識	看護学領域科目 各領域実習
		災害看護に関する基礎的知識	災害看護学
		プライマリ・ヘルスケアに関する基礎的知識	国際社会と保健活動 医療の本質 地域看護学
		管理・教育に関する基礎的知識	看護教育学・看護管理学 総合看護実習
	異文化理解	多種多様な文化に関する基礎的知識	国際社会と政治 人類と文化
		海外での体験学習	国際看護学演習
実践能力	人間関係構築能力	語学力	英語 (Reading I・II・III, Writing I・II・III, Lis.&Spe. I・II・III) フランス語 I・II 中国語 I・II 看護英語 基礎ゼミ
		コミュニケーション能力	援助の人間関係論 各領域実習
	看護実践能力	確実な看護技術	赤十字救急 I・救急法 各領域看護学講義・演習・実習
		マネジメントに関する基礎的能力	
		問題解決能力	
	自己管理能力	多様な文化や状況への適応能力	国際看護学・国際看護学演習 人類と文化
		生活力	教養科目
人間性	ヒューマン・ケアリング	自立した精神	各看護学領域講義
		人を思いやるやさしさ	各看護学実習
		協調性	赤十字奉仕団活動, ボランティア活動など課外活動支援 学生生活支援 等

表3 国際救援を目指す学生のための履修モデル

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	卒業後
講 義	赤十字の歩みと活動 英語 (Reading I-1) 英語 (Writing I-1) 英語 (Lis & Speak I-1) 基礎ゼミ I (英語集中) ※人間存在 ※法と人権 基礎看護学実習 I	成人看護 II (急性期) ※英語 (Reading II) ※英語 (Writing II) ※英語 (Lis & Speak II) ※赤十字救護 I・救急 ※フランス語・中国語 I-1	生命と倫理 ※国際社会と保健活動 ※フランス語・中国語 II ※赤十字救護 I・救急	※国際看護学 ※国際看護学演習 (8 月) ※アメリカ (先進国) [※アジア (途上国)] ※赤十字救護 I・救急 各領域看護学実習・総合看護実習 災害看護学 ※看護英語 ※フランス語・中国語 III	BTC※1 HELP※2 赤十字救急法指導員講習 国内拠点病院への就職
	後期 英語 (Reading I-2) 英語 (Writing I-2) 英語 (Lis & Speak I-2) 基礎ゼミ I (英語集中) 医療の本質 ※ 国際社会と政治 ※人類と文化 基礎看護学実習 II	※英語 (Reading III) ※英語 (Writing III) ※英語 (Lis & Speak III) ※フランス語・中国語 I-2 成人看護学実習 I			
課外活動	赤十字奉仕団 (地域・青年), 英会話サークル・TORIC, 広島県内における諸活動への参加				
自己学習支援	国内における異文化交流				

※1: Basic Training Course for Future Delegates (国際救護・開発協力要員基礎研修会)～日赤主催

※2: Health Emergencies in Large Populations ～ICRC, 日赤, 日赤国際九州看護大, WHO 企画

※: 選択科目